

北原亞以子

深澤運みおとおノ木屑小屋



深澤通子番小屋

み
お
ど
お

北原亞以子

講
談
社

深川みおとお澤きど通り木戸ばん番小屋

定価 一四〇〇円 (本体 一三五九円)

著者 北原亞以子

一九八九年四月二十四日 第一刷発行

発行者 加藤勝久

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二―二二一 郵便番号 一一二

電話 (〇三) 九四五―一一二 (大代表)

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 大進堂株式会社

© AIKO KITAHARA 1989 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部にてお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは、

文芸図書第二出版部にてお願いいたします。

深川落通り木戸番小屋
目次

深川落通り木戸番小屋	7
両国橋から	41
坂道の冬	71
深川しぐれ	107
ともだち	139
名人かたぎ	169
梅雨の晴れ間	203
わすれもの	235

装幀
蓬田やすひろ

深川 落^み通^おり 木^き戸^ど番^{ばん}小屋

深川
溝みぞ通とおり
木き戸ど番ばん
小屋

夜になると、川音が高くなる。深川中島町は三方を川でかこまれていて、木戸番小屋は町の南を流れる大島川沿いの、俗に露通りと呼ばれる道の端にあった。町の西側へ流れてくる仙台堀の枝川と、大島川が一つになって隅田川へそそぐところである。

大島川の向こうは新地と呼ばれる岡場所で、隅田川河口の見晴らしのよさを売物にした、百歩楼、大柴楼などの贅をつくした高樓が建ちならび、いつもなら、三味線や太鼓や、客をはこんできた船頭の声や、出迎えの女軽子と呼ばれる茶屋の女中の声が風にのって聞えてくるのだが、今日は暮六ツの鐘を合図に雨が降り出したせい、酔客の大声さえも聞えてこない。

あまりの静かさに、笑兵衛は表戸を開けてみた。向かい側の川岸にある自身番の灯りがかすんで見える。雨は、音もなく降りつづいているらしい。

「寝かせてもらいますよ」

声にふりかえると、女房のお捨が四疊半一間の上り口に立っていた。眠そうに目をしばたたき、それが恥ずかしかったのか、首をすくめて笑う。ふっくらとした頬の片方にえくぼができた。

自身番に交替で詰めている差配さはいの一人、弥太やた右衛門えもんは、笑兵衛と顔を合わせるたびに、まったく品がよくてきれいなおかみさんだと、感に堪たえないように言う。が、さすがに年はあらそえず、髪に白いものがふえてきた。先日、笑兵衛が自分の年をかぞえてみて、五十三になったと言うと、「あらいやだ、そんなにお年寄りだったんですか」と笑いころげたが、お捨だって四十九になっている筈だ。

急に雨と風が強くなって、吹きつけられる雨の音が川音よりも高くなった。笑兵衛はあわてて戸を閉めた。内職に売っている草鞋わらじ、蠟燭ろうそく、手拭い、そのほか雑多な品にかぶせた風呂敷が、風でめくれあがっている。お捨が土間へ降りて来ようとしたので、笑兵衛は手を振った。

「いいよ。早くお寝み」

「すみませんね、あなた」

お捨は片頬のえくぼを深くして頭をさげ、寢床の中に入った。

木戸番夫婦は、夜と昼とのすれちがいでも暮らしている。夫は夜、町木戸を閉めてから医者や産婆など緊急の用事がある者のためにぐぐり戸を開けたり、夜廻りに出たりするのが仕事であった。ところが、町からその仕事に支払われる手当では暮らしてゆけず、なかば公認のかたちで番小屋の土間を店にして、女房が昼間、荒物あらものや駄菓子だかしを売っているのだった。

しばらく上りあが框かまちに腰をおろしていた笑兵衛は、腰を叩きながら立ち上がって、土間の壁にかけである蓑みのと笠をおろした。そろそろ夜廻りに出かける時刻だった。

予備の蠟燭を持ち、灯が消えた時の用心のため、火打石もふところに入れる。雨戸が風に鳴っ

ていた。

蓑笠をつけ、行燈の灯を蠟燭にうつそうとすると、眠っていた筈のお捨が起き上がった。

「どうした。眠れないのか」

「いえ——」

お捨は絆纏を羽織って寢床から出た。

「誰か、来てますよ」

笑兵衛は戸口に近づいた。雨戸は風に鳴っているのだと思っていたのだが、確かに誰かが外にいる。開けようとする戸に寄りかかってしまうので、ただでさえたてつけのわるい戸は敷居からはずれ、それをまた無理に開けようとしては、意気地なく寄りかかっているらしい。

「怪我をなさっているんじゃないか」

と、お捨が言った。笑兵衛は、はずれている戸を敷居にはめこもうとした。が、外ではまた寄りかかっているらしく、思うように動かない。やむをえず、お捨の手も借りて力まかせに戸を開けると、支えを失った男が土間へ転げ込んだ。ぬれねずみの若い男だった。

「勝次じゃないか」

笑兵衛が抱き起こすと、お捨が行燈の灯を近づけた。目をつむったまま荒い息をして、軀のあちこちに擦傷があるが、大きな怪我はしていないらしい。吐く息が熱柿くさかった。

「ばかやろう、足腰もたたなくなるほど酒を飲んで——」

笑兵衛は、言いかけた言葉をのみこんで苦笑した。家の中に入れた安心感からか、勝次はもう

寢息をたてている。雨戸に寄りかかって半分眠っていたのかもしれない、お捨が気づかなければ、この雨と寒さで、死なぬまでも高熱ぐらいは出していただろう。

雪のたれる着物を脱がせ、正体もなく眠りこけて重い軀を、二人で苦勞して座敷の上へ運ぶ。お捨は、戸棚の奥から浴衣のほどいたものを出した。幾度も洗濯をして布地がやわらかくなっているの、近所の若夫婦に子供が生れたなら、おむつをつくってやろうとっておいたのだが、ずぶぬれの軀を拭くにはちょうどよかった。

ためらう笑兵衛を押しつけて、お捨は勝次を素裸にした。強く摩擦するように勝次の髪や軀を拭い、手早く笑兵衛の下着や着物を着せて、寢床まで転がしてゆく。

「年齢ですなえ」

よほど重かったのか息がはずんでいて、お捨は額に手を当てて苦笑した。

「いや、若いよ」

笑兵衛が夜具をかけてやると、勝次は、うるせえとわめいて両腕を突き出した。

笑兵衛とお捨は、思わず顔を見合わせた。勝次の左手は、小指から中指までが掌に貼りついて、折れ曲がったままになっていた。南組三組の纏持ちだった勝次が、去年、左肩から左腕にかけて火傷を負い、ついに癒すことのできなかった傷であった。

目が覚めた。一瞬、どこにいるのだらうと思った。

軀を起こそうとすると、頭が割れるように痛む。目をつむり、こめかみを押えて夜具の上に坐

った。

「目が覚めましたか」

女のやわらかい声が聞えた。勝次は、ゆっくりと目を開いた。草鞋や蠟燭や手拭いや、鼻紙などを所狭しとならべた店が見え、姉様あねさんかぶりの女の姿が見えた。

「ここは……」

「澤通りの木戸番小屋ですよ」

姉様かぶりをとった女はお捨て、痛む頭を横に向けると、隣りの寢床で番太郎の笑兵衛が眠っている。着ている物も自分のものではなかったが、なぜ木戸番小屋で他人の着物を着て眠っていたのか、まるでわからなかった。新地へ遊びに行つて、帰りに大島町の居酒屋で飲んだところまでは記憶にある。雨が降っていたことも覚えてるが、どこをどう歩いてここへ来たのか、まったく思い出せなかった。

「ごはん、食べられる？」

と、お捨てが言った。食べられるどころではなかった。頭は錐きりで刺されるようだし、胸は油で焼かれているようだった。焼かれた胃の腑はらの皮をはがされるようなおくびが出て、顔をしかめると、お捨ては口もとに手をあてて笑った。

「それじゃ、濃いお茶でもいれてあげましょうか」

お捨てが座敷に上がって来たので、勝次は頭の痛みをこらえて立ち上がった。その姿を見て、お捨てはまた笑った。火傷のあとを笑われたのかと思ったが、お捨ては、笑兵衛の着物が勝次の軀からだに合

わず、手足がむきだしになっているのを笑ったのだった。

「駄々っ子ね。うちの笑兵衛さんも小さい方じゃないけれど、あなたは特別背が高いから」

つまらないことで笑う女だと思った。第一、ころころと転がるような声で笑われては、痛む頭にひびいてたまらない。顔をしかめて頭に両手をあてると、お捨は、ごめんなさいと声を出さずに言ったて口許を袂でおおった。

娘のようなしぐさだが、妙に品がある。笑兵衛とお捨については、日本橋のおおだな大店の夫婦だったと言う者もあり、京の由緒ある家の生れで江戸へ駆落ちをしてきたのだと言う者もあって、澤通りの木戸番小屋へ住みつくまでのことは、結局誰も知らないらしい。

笑兵衛だの、お捨だのと、ふざけた名前をつけやがって――

胸のうちに毒づきながら熱い茶をすすっていると、「笑さんは、まだ寝ているかい」という声がした。弥太右衛門の声だった。

自身番屋に詰めるのは地主や家主の役目だったのだが、いつの間にか弥太右衛門のような、家主に雇われて貸家を管理する差配が詰めるようになり、町のこまごまとした事務も書役が雇われて勤めるようになった。市中見廻りの町方同心が「何事もないか」と尋ねてゆく所でもあり、自身番は忙しい筈なのだが、弥太右衛門達は始終将棋をさしている。おそらく、今も笑兵衛を誘いに来たのだろう。

何気なく木戸番小屋をのぞいた弥太右衛門は、勝次の姿を見て舌打ちをした。

「お前、こんなところで何をしているのだ」

「別に」

勝次は横を向いた。こんなことには慣れているのか、笑兵衛は目を覚ます気配もなく、軽い寝息をたてている。お捨は、勝次の寝ていた夜具を二つに折って、弥太右衛門の腰をおろす場所をつくった。

「呆れたものだ。毎日毎晩飲みつづけて、^{からだ}軀をこわしたらどうする気だ」

「もう、こわれてらあ」

お捨が弥太右衛門に茶をすすめた。弥太右衛門は、夜具をたたんだあとへ腰をおろした。

「お前に親がいたら、わたしと同じことを言う筈だよ。火消しが手前^{てまえ}の家にも帰れないほど酔っ払って、もし昨日^{きのう}の晩、火事でもあったらどうする気だ」

勝次は、口から出なかった言葉をかううじて飲みこんだ。その左手で火消しは無理だから、見附警固の役人や寺社参詣の際の供廻りに弁当を届ける賄い屋^{まなな}で働いてくれと、先月の末に頭^{かしら}から言われたことは、まだ誰にも話していなかった。

「聞いて下さいよ、お捨さん。ご存じの通り、こいつはわたしの店子^{たなこ}でね。火傷をするまでは、^{とび}薦にはめずらしく、博奕^{ばくち}も深酒もしない男だったんだが」

「それどころか、とても優しいお人でしたよ」

「うるせえな」

「いいじゃありませんか、お話したって。実はね、弥太右衛門さん、勝次さんがわざわざここまで手拭いや蠟燭^{ろうそく}を買いに来て下さるので、わけを尋ねたことがあるんです。そうしたら、少しで

も儲けさせて、早く隠居させてやりてえって」

「そういう奴だったんですよ。ところが、火傷以来この通りだ。纏が持てなくなったからって、何もこの世の終りじゃあるまいと言うんだが」

勝次は横を向いた。どうせお捨も同じような叱言を言うのだろうと思ったが、案に相違して、お捨は黙っていた。

「火傷が何だい。長い間火消しをしていれば、火傷をすることもある。それくらい、承知してたんじゃないのかえ？ 現に、お前とこの頭だって、若い時に大火傷をしているんだ」

頭の火傷は顔から肩へかけてのものだと、勝次は思った。頬にひきつれが残っているが、手も足も無事だった。見ようによつてはひきつれがいきのいい火消しの印となつて、かえつて女達にも騒がれたらしい。賄い屋に行けと言われる勝次とは、火傷が違ふのだ。

俺は、火消しになりたくつて火消しの家へ奉公にいった。米をといでめしを炊き、そのめしを御膳籠に詰めたくつていったのじゃねえ。仲間からつきあいのわるい奴だと言われながら、博奕も深酒もしなかつたのは、ジャンと半鐘が鳴った時、真先に火事場へ駆けつけるためだ。いつだって真先に素っ飛んで行つて、他の組に消口をとられたことのねえ俺が、どうして南組から追いつたされなくつてはならねえのだ。

「聞いているのか、え？」

弥太右衛門の叱言は、まだつづいていた。

「こうやって、みんなから心配してもらえうちが花なのだぜ」